名詞節か副詞節か－「の節」の名詞性・節性の検討－

天野みどり（和光大学）

０．はじめに

◇本研究の目的

現代日本語の「のに・ので」は接続助詞とされる。他方、ある一群の「のが・のを」は、その「が・を」が格助詞であるとも「のが・のを」全体が接続助詞であるとも言われる。本研究では、こうした接続助詞的な「のが・のを」節を中心的な考察対象とし、副詞節「のに・ので」節と比較しながら、その名詞性を吟味する。「の」節は古典語の準体句を引き継ぐとされるが、その特徴についても考える。

◇中心的な考察の対象…逸脱的特徴を持つように見える「のが・のを」節の文。本研究では接続助詞的な「のが・のを」節の文と呼ぶ。

（1）　入院中は、毎日のように彼女が見舞ってくれた。…略…それでも、心細さは消えなかった。都内の実家を離れ、一人暮らしを始めて 3 年目。ろくに実家に帰ることはなかった**のが**毎日、病院の公衆電話から家族の声を聞いた。　（『朝日』2011.7.13）

（2）　今までの気象学は『あらしの気象学』だっだが、ほかに近年は『静穏の気象学』が必要になってきた、という話がある。今までは暴風雨を警戒していればよかった**のが**、近年、静穏な日にも災害がおこる。　（レー（1988）p.84『朝日』「天声人語」1972.11）

（3）　昨年の選挙でかなり手元は苦しくなっていた**のを**、十数名の勤続者すべてにそれぞれに応じた着物を贈ることにした。　（北杜夫『楡家の人々』p.122）

◇逸脱的特徴

a 接続助詞的な「のが・のを」節は、主節述語句から語彙的に予測される主格や対格の意味を表していない。

例（1）「聞く」→予測されるガ：「聞く動作をするヒト」

例（3）「贈る」→予測されるヲ：「誰かに贈るモノ」

b 主節述語句が語彙的に要求する主格や対格が「のが・のを」節の他に顕在する場合がある。

例（2）～のが、災害がおこる

例（3）～のを、着物を贈る

c 許容度が不安定。かなり低いものもある。

→「のが・のを」節が主格や対格だとすると、それが関係する述語句が後続に無い。

（1）（2）［～ノガ］→←［Ｖ不明］　　（3）［～ノヲ］→←［Ｖ不明］

１　当該の「のが・のを」節の位置づけに関する先行研究

①「のが・のを」を接続助詞とする。
　…黒田（1999）・近藤（2000）・加藤（2006）など

②「のが・のを」を接続助詞的とする。格助詞性よりも接続助詞性を明らかにする。
　…寺村（1978a）（1978b）（1982）・レー（1988）など

③「のが・のを」を格助詞とする。接続助詞性よりも格助詞性を明らかにする。
　…天野（2011）（2012）など

１－１　「のが」を主格とする：天野（2012）

◇「なる・溶ける・変わる」など状態変化自動詞を述語とする文は、状態変化主体（＝ヒト・モノ）ではなくヒト・モノの〈変化前の様態・状況〉（＝サマ）を主格で示し、そのサマが異なるサマに変化することを表す場合がある。

（4）　昨日までの富士山頂の青さ**が**一夜にして真っ白になった。

（5）　札幌市内の主要道路のアイスバーン**が**すっかり溶けた。

［サマ名詞句］**が** →← 状態変化述語句

この意味〈あるモノ・ヒトの、ある時点で規定される様態・状況Ｘが、後の時点で異なる様態・状況Ｙに変化する〉を表す状態変化自動詞述語文を〈サマ主格変遷構文〉と呼ぶことにする。

◇接続助詞的な「のが」節の文はサマ主格変遷構文であることを示す特徴を持つ。

特徴①主節述語が状態変化自動詞であることが多い
特徴②変化後の状態を表す句が「～に」などで共起することが多い
特徴③「のが」節述語句Ｖ１に「～た・ていた」形や「～はずだ・つもりだ」形が多く、ある時に確定された様態や、確定された予定の様態が表されることが多い
特徴④２時点の推移を表す時間的要素が共起することが多い
特徴⑤移り変わる条件や移り変わる契機を表す要素が共起することが多い

（6）　ほんの数カ所を換える、という筈なのが、いつの間にか会社中の机を動かすというような大ごとに なってしまったのだ。　（椎名誠『新橋烏森口青春編』p.292）

接続助詞的な「のが」節の文は、〈あるモノ・ヒトの、ある時点で規定される様態・状況Ｘが、後の時点で異なる様態・状況Ｙに変化する〉意味を表し、サマ主格変遷構文に属する文であると考えられる。

◇逸脱的な特徴を持つ、接続助詞的な「のが」節の文は、サマ主格変遷構文をベースとして類推拡張してできた文であると考えられる。非状態変化動詞からなる述語句を、推論により文脈に合致した状態変化の意味に変容解釈していると考えられる。

（1）　入院中は、毎日のように彼女が見舞ってくれた。…略…それでも、心細さは消えなかった。都内の実家を離れ、一人暮らしを始めて３年目。ろくに実家に帰ることはなかったのが毎日、病院の公衆電話から家族の声を聞いた。

《ほとんど実家と関わらなかった状況が、毎日家族の声を聞き関わるように変化した》

（2）　今までの気象学は『あらしの気象学』だっだが、ほかに近年は『静穏の気象学』が必要になってきた、という話がある。今までは暴風雨を警戒していればよかったのが、近年、静穏な日にも災害がおこる。

《今までは（我々は）暴風雨を警戒していればよかった状況が、静穏な日の災害も警戒しなければならなくなった》

◇接続助詞的な「のが」節の文は、サマ主格変遷構文をベースとした文であり、その「が」は主格を表す格助詞である。

◇「の」節全体がサマを表す名詞的要素であり、変遷構文の主格を構成する。

１－２　「のを」を対格とする：天野（2011）

◇「やめる・止める・遮る」などの他動詞はある方向に向かって継続・進行する事態に意図的に力を加え、その方向性を止めたり変えたりする意味を表す。こうした方向性制御他動詞を述語とした文を方向性制御構文と呼ぶ。

（7）　充は大学をやめた。

《大学で学修を続ける事態の方向性》→←《やめる》

（8）　ソルビン酸は微生物の成育を抑制してしまう。

《微生物が成育してどんどん成長していく事態の方向性》→←《抑制する》

◇接続助詞的な「のを」節の文は方向性制御構文をベースとした類推拡張の文である。

（9）　二人がそれを手帳に写しとろうとするのを、じれったそうに手をふって、「いいんだよ、それは持ってお行き。こっちにゃ住所の控えはあるから」（レー（1988）p.83）

《手帳に写しとろうとする方向性》→←《手をふって遮る》

（10）　というのも、その年、国民総動員ということで、ほんとうは五年制だった女学校を四年で卒業になり、おまけに入学が決まっていた東京の学校が三月の空襲で焼けて自宅待機ということだったのを、ちょうど家の近くに疎開して来た療品廠（りょうひんしょう）という海軍の医療品をあつかう部門で四月から働くことになっていたからだった。

（須賀敦子「夏の終わり」p.28）

《自宅待機が継続する方向性》→←《4月から自宅外で働き自宅待機を変える》

◇接続助詞的な「のを」節の「を」は対格を表す格助詞である。

◇「の」節全体が動きの自然な方向性を表す名詞的要素であり、方向性制御他動構文の対格を構成する。

◇接続助詞的な「のが・のを」は「サマが・コトを」を表す。「連体修飾節＋名詞＋が・を」とは意味が異なる。

（11）　（マッテオは）普段は遠慮がちなのが、酒を飲むとしゃべりまくった（という状態になった）。＝主節事態は無意図的状態変化の意味に変容解釈・のが節＝サマが

（12）　普段は遠慮がちなマッテオが、酒を飲むとしゃべりまくった。

＝主節事態は意図的行為・のが節＝ヒトが

１－３　接続助詞「のに」との違い

◇接続助詞的な「のが・のを」節が表すとされる逆接・対比の意味の根源＝天野（2011）（2012）では、接続助詞的な「のが・のを」が表す逆接・対比の意味合いは、主格・対格が節ではない（名詞の）サマ主格変遷構文・方向性制御構文自体に、語用論的含意として生じるとする。接続助詞化したためにこの意味が発現したわけではない。

（13）　（せっかくの）タペストリーの派手さが、時を経て柔らかくなってしまった。

（14）　（せっかくの）幸運を無駄にした。

◇接続助詞的な「のが・のを」節の逆接・対比の意味はサマ主格変遷構文・方向性制御構文であるために生じる意味なので、広く「食い違い」の意味を表す「のに」とは異なる。

（15）　田中は社長なのにまだ独身だ。

（16）＊　田中は社長なのがまだ独身だ。（下線部をサマ変遷の自動的意味に解釈困難）

（17）＊　田中は社長なのをまだ独身だ。（下線部を方向性制御の他動的意味に解釈困難）

◇許容度の違い

接続助詞的な「のが・のを」節は、ベースとする構文の意味に見合うようにその述語句全体を状態変化自動詞・方向性制御他動詞の持つ意味に変容解釈する。その変容解釈がしにくければしにくいほど、許容度は低くなる。

◇接続助詞的な「のが」節の許容度調査　（2012.5.30 東京の大学生 48 人）

：自然=2 点/少し不自然=1 点/全く不自然=0 点の平均点。小数点第三位以下四捨五入。
：主節述語句…状態変化動詞=a，非状態変化動詞=b，～ガ＋動詞=c

①（1.81）二十億ドルだった**のが**、九十一億ドルにはね上がった。 a
②（1.81）少年だと思っていた**のが**、急に青年に見えた。 a
③（1.67）延滞額が融資額全体の二二％だった**のが**、三四％と急激に悪化している。 a
④（1.31）ほんの数カ所を換えるというはずな**のが**、会社中の机を動かすというような大ごとになってしまった。 a
⑤（1.19）ふだんは静かで遠慮がちにさえみえる**のが**、ひとつの話題に夢中になるとしゃべりまくる。 b
⑥（1.17）田中は書類を山本に渡すはずだった**のが**、山本が不在だったので林に手渡した。 b
⑦（1.13）教員の私も学生も女性同士で、静かに文章を作る勉強をやりましょう、とそんな気持ちで始めた**のが**、往時の倍の七十人近くが席を占めている。 c
⑧（1.13）どうにかして母親の愛情をつなぎとめるのが幼いときからの彼の最大の関心事だった**のが**、こうみなに死なれてみるとはりあいというものがまったくなくなったも同然である。 c
⑨（1.04）どの作品もあんまりなじめなかった**のが**、この作品に出会ってなにかほっとしている。 b
⑩（1.00）写真のプリントが五枚あった。もと六枚だった**のが**、一枚は（私が）「通訳」の杉浦雄之輔の「顔写真」に利用した。 c
⑪（0.94）ホプキンズは十九世紀のイギリスの詩人。ながいあいだマイナーな宗教詩人としか考えられていなかった**のが**、再評価の声が高い。 c
⑫（0.23）インドネシアは朝夕スコールがある**のが**、ほとんど雨が降らない。 c

高い←　a 主節述語句が状態変化動詞　＞　b 非状態変化動詞　＞　c ガ＋述語　→低い

◇「のに」文は主節述語動詞の意味タイプが様々であり許容度も低くならない。

（18）　田中さんは老けている**のに**、山田さんは若々しい。（状態）〈*～ニ若々しい〉
（19）　男は全く抵抗しなかった**のに**、警官は男を叩きのめした。（動作）〈*～ニ叩きのめした〉

◇１節のまとめと問題の所在：

接続助詞的な「のが・のを」節の「が・を」は格助詞、「の」節は名詞節（補文）である。
→それならば接続助詞「のに・ので」による副詞節と、節の名詞性は異なると言えるか？

２　「の」節の名詞性の検討

２－１　考察の前提：「の」節の分類

◇大島（2010）：節に後接する「の」の用法

①ノ型名詞節　：太郎が買ったのを借りた。
②ノ型補文　：太郎が花子とつきあっているのを知っているか。
③主要部内在型関係節：太郎が鯛を釣ってきたのをみんなで食べた。
④分裂文　：太郎が買ったのは本だ。

◇レー（1988）：「の」節の分類（表示改・天野）

- の節
  - 補語としての名詞節[の1]
  - 底部先行の連体節
    - 事態顕述の連体節
      - 縁合関係の連体節[の2]
      - **対比関係の連体節**[の3]
    - 前方限定の連体節

（の１＝の型補文の「の」、の２＝主要部内在型関係節、の３＝接続助詞的な「のが・のを」節）

表１　①～③についての先行研究の分類

	大島（2010）	佐治（1993）	石垣（1955）（中古語）	近藤（2000）（中古語）	レー（1988）
（1）モノ・ヒト	ノ型名詞節	準代名詞ノの節	形状性名詞句（含・内在型）	同一名詞準体（含・内在型）	
（2）サマ・コト	ノ型補文（含・内在型）	狭義準体助詞ノの節	作用性名詞句	同格準体	の１・の２・の３

※中古語の準体句は「の節」に引き継がれたと考えられる。（近藤（2000）・青木（2005））
※（1）（2）は全く異なるとされる（近藤（2000）大島（2010））が実例では判別が困難（近藤（2000））ともされる。

◇本研究によれば、接続助詞的な「のが・のを」節は (2) サマ・コトに位置づけられる。
「～のが」＝＜ある時のサマが＞・「～のを」＝＜事態の推移する自然な方向性を＞

２－２　(2) サマ・コト＝補文「の」の名詞性

◇「のが・のを」が格を構成する典型例でも、その「の」の名詞性は低いとされている。

統語的制約：橋本（1994）①「の」＋「が・を・に」以外の格②「だ・である」＋「の」③「の」＋「だ・である」④「の」＋連体助詞「の」、大島（2010）⑤「の」＋「にする」⑥「だろう（であろう）・う・よう・まい」＋「の」
→名詞性の低さの反映

２－３　レー（1988）

◇「の」の名詞性
「の 1」＞「の 2」＞「の 3」の順で減少　(p.114)
（の 1＝の型補文の「の」、の 2＝主要部内在型関係節、の 3＝接続助詞的な「のが・のを」節）
レー（1988）は名詞性の希薄化と「が・を」の接続助詞への近接が関わるとする。
◇「の 3」の名詞性の希薄化に関する指摘①ノガ交替②ト連結③とりたて付加

２－３－１　ノガ交替

(20)　太郎が／の買った**のを**借りた。　（三上（1953）井上（1976））の 1
◇レー（1988）は「の 2・の 3」では主格「が」を「の」にすることはできないとする。
(21)　また雑文欄に春山行夫が／?の『峰の小舎の生活』という随筆を書いている**のを**読んだ。　（レー（1988）（28b））の 2
再検討◇「の 2・の 3」でもノガ交替は可能と思われる。
(22)　鍵盤をたたく指さきが／のこごえていた**のが**、次第にあたたまってきた。
(23)　鍵盤をたたく指さきが／のこごえていた**のが**、次第にしびれがほぐれてきた。
(24)　その日も、アドリアーナが／の送ってきてくれた**のを**、まだ時間があるから、このザッテレの河岸を散歩しようということになったのだった。
◇副詞節「のに・ので」
(25)　鍵盤をたたく指さきが／??のこごえていた**のに**、レッスンを開始した。
(26)　アドリアーナが／??の送ってくれた**ので**、夜道が怖くなかった。

２－３－２　ト連結（並立助詞連結）

(27)　太郎が買ったの**と**次郎が買った**のを**借りた。　の 1
◇レー（1988）は「の 2・の 3」は、「の」節どうしをトで連結することができないとする。
(28)＊　40 年-44 年の間、密輸入摘発件数は 29 件だったのと、外国人による犯罪件数は 39 件だった**のが**、50 年の一年間だけで 3 倍ぐらい増加したと推定される。
（レー（1988）（39abc）p.32）
再検討◇（28）が不自然なのは主題表示「は」が起因。「が」に変えれば許容度は増す。
(29)　40 年-44 年の間、密輸入摘発件数が 29 件だったのと外国人による犯罪件数が 39 件だった**のが**、50 年の一年間だけで 3 倍ぐらい増加したと推定される。
(30)？地域の民謡サークルになじめなかったのや、学校の音楽が嫌いだった**のが**、オペラに出会って突然音楽の神様が降りてきた。
(31)？多くの実験員が、結果が出ずやめようとするのや、時間が無くて諦めようとする**のを**、室長は最後まで目標を捨てなかった。

◇副詞節「のに・ので」

(32)?? 地域の民謡サークルになじめなかったのや、学校の音楽が嫌いだった**のに**、オペラに出会って突然音楽の神様が降りてきた。

(33)?? 多くの実験員が、結果が出ずやめようとするのや、時間が無くて諦めようとする**ので**、室長はとうとう中止の決定をした。

２－３－３　とりたて

(34) ひろ子は…リュックに目じるしの赤ビロードの布はしが結びつけてある**のまで**、すっかり見られていることを感じながら歩いて行った。　の 1

（レー（1988）pp.32-33 宮本百合子「播州平野」）

◇レー（1988）は「の 2・の 3」はとりたて助詞でとりたてることができないとする。

(35)＊ 自然災害で、農地は各地で干からびている。カボチャや豆などの苗も枯れており、全土の米の収穫は八三年に百六十万トンに達した**のまでが**、逆戻りした。

再検討◇「も／さえ」などでも検討

(36) 自然災害で、農地は各地で干からびている。カボチャや豆などの苗も枯れており、全土の米の収穫は、八三年に百六十万トンに達した**のさえが**、逆戻りした。

(37) 体調が悪いからと固辞する**のを**さえ／も、社長は無理矢理グラスを満たした。とにかく酒を強要する人なのだ。

◇副詞節「のに・ので」

(38)＊ 自然災害で、農地は各地で干からびている。カボチャや豆などの苗も枯れており、全土の米の収穫は、八三年に百六十万トンに達した**のに**さえ／も、逆戻りした。

(39)＊ 体調が悪いからと固辞する**ので**さえ／も、社長はグラスを満たさなかった。

２－４　「の」節への連体修飾節付加

(40) 気がかりだった、服が青みがかっていた**のを**、妻に見つけられた。　の 1

(41) 気がかりだった、服が青みがかっていた**のが**、強力洗剤で青みだけが落ちた。の 3

(42)? 気がかりだった、生徒が諦めようとする**のを**、教員たちは何度も励ましのことばをかけた。　の 3

◇副詞節「のに・ので」

(43)＊ 気がかりだった、服が青みがかっていた**のに**、強力洗剤で白さが戻ってきた。

(44)＊ 気がかりだった、生徒が諦めようとする**ので**、教員たちは励ましのことばをかけた。

◇ 2 節のまとめ：「の 1」の名詞性の根拠となる①ノガ交替②並立助詞連結③とりたて助詞付加と、さらに④連体修飾節付加について、接続助詞的な「のが・のを」節についても検討してみると、いずれも多少の不自然さがあっても「のに・ので」節よりは自然であると判断された。「のに・ので」節が完全に副詞節であるのに対し、「のが・のを」節はそれよりも名詞性があることを示すものと考える。

「の」節の名詞性**高** ← **低**

典型的な格助詞「のが・のを」　接続助詞的な「のが・のを」　典型的な接続助詞「のに・ので」

従来 ⌣ 部分で名詞性の違いを論じてきたが、接続助詞「のに・ので」と比較すると、むしろ接続助詞的な「のが・のを」は典型的な格助詞用法に近いことがわかる。

３．他の「の」節(の 1)の性質を共有するか

◇「の」節の対象性（＝無意志性）

近藤(1997・2000)：石垣（1955）の「作用性用言反撥の法則」を「能格性」の観点から見直し、古典語の準体句と現代語の「の」節は「対象」という性格を共有しているとした。

※現代語「ことが」節＝自動詞・他動詞・使役形の主語となる

現代語「のが」節＝非対格自動詞・形容詞・名詞文の主語にしかならない

→接続助詞的な「のが・のを」にも認められる性格。接続助詞的な「のを」は他動詞構文のヲ句としての対象性を持つし、接続助詞的「のが」はサマの意味であり、無意志的な「対象性」を示し、その主節述語句は状態変化自動詞すなわち非対格自動詞である。

◇「の」節動作と主節動作の意味的関係

「の」節と「こと」節の違いについて

＝「のが」の後接述語（見える・聞こえる・分かる・感じられる・思われる・悲しい・嬉しい・待ち遠しい…)・「のを」の後接述語（見る・知る・感じる・聞く・記憶する・嫌う・思う・待つ…）(工藤（1985）他)、「の」節事態の〈具体性〉(久野（1973))、「の」節事態と主節事態の〈同一場面性〉〈密接性〉(坪本（1984))、「の」節事態の〈既定性〉(橋本（1990・1994))、〈認知主体が当該時点で経験する事態〉(益岡（1997))、〈直接知覚現象〉(堀江（2002)）など。

★野田（1995）

「の」 …「埋め込み節の表す事態の実現に合わせてしかできない動作を表す」(p.426)

「こと」…「埋め込み節の表す事態を、まとまった事柄、抽象的な概念として捉える動作を表す」(p.427)

★佐治（1993）:「「の」は、事態をそのままで、何の意味も付け加えずに体言化し、「こと」は、事態を事柄としてまとめて体言化する」(p.9)、大島（1996・2010）:「の」は〈事象の全体〉を表し「こと」は〈あらまし〉・「の」型補文は「名詞のもつ情報を介することなく、「の」が導く節が直接に主文事象と関係する」(大島（2010）P.263)

→「の」節の特徴についてはなお考察が必要だが、接続助詞的な「のが・のを」節は、「「の」節の実現事態（含・仮定実現事態）とそれに合わせてしかできない主節の動作事態」という特徴を持つと言ってよい。接続助詞的な「のが」節は、ある時点に認められるサマを表し、主節事態は状態変化自動詞の意味に変容解釈されて、そのサマが異なるサマに変化する事態として解釈される。この事態は、「のが」節で表されるサマが実現しなければ起こりえない事態である。接続助詞的な「のを」節は、自然な流れとして予測されるある方向性を持った動きが表され、主節事態は方向性制御他動詞に変容解釈されて、その動きの方向性が止められたり変えられたりと制御される事態として解釈される。これも、「のを」節で表される動きを伴う事態が実現しなければ起こりえない事態である。

◇3 節のまとめ：接続助詞的な「のが・のを」節で表される事態は、古典語の準体句に見られる特徴「対象性」を引き継ぎ、他の「の」節同様に、主節事態との間に「事態の実現と、その実現に合わせてしかできない動作」の関係が認められる。

４．おわりに

接続助詞的な「のが・のを」節の文は、一見「のが・のを」と関係する動詞が存在しないように見えるが、それぞれ、「なる」などの状態変化自動詞を用いたサマ主格変遷構文、「さえぎる」などの方向性制御他動詞を用いた方向性制御他動詞構文をベースとして、述

語句を変容解釈して成り立つ文である。そのために、それぞれのベースに属すると解釈しにくい場合には許容度が落ちる。他方、「のに・ので」節の文は、選好する述語類型が存在せず、述語によって許容度が低下することは無い。

また、接続助詞的な「のが・のを」節は、①ノガ交替②並立助詞付加③とりたて助詞付加④連体修飾節付加を施した場合に、少なくとも、「のに・ので」節よりは自然な文となり、他の「の」補文と同程度の名詞性は示すと言ってよい。

こうした点は、接続助詞的な「のが・のを」節が副詞節「のに・ので」とは異なる位置にあり、名詞化された「の」節に格助詞が付与されたものとみる見方を支持する。

従来、「こと」節とは異なる「の」節の特徴が種々に述べられてきたが、接続助詞的な「のが・のを」節もその特徴を共有する。すなわち、接続助詞的な「のが・のを」節も古典語の準体句を引き継ぐ特徴「対象性」を持ち、また、主節事態との間に「事態の実現と、その実現に合わせてしかできない動作」の関係が認められる。

参考文献

青木博史（2005）「複文における名詞節の歴史」『日本語の研究』1:3,pp.47-60

天野みどり（2011）『日本語構文の意味と類推拡張』笠間書院

天野みどり（2012）「様態・状況主格変遷構文－いわゆる接続助詞的な「のが」の文の意味解釈－」2012.10.6 公開ワークショップ（構文の意味をめぐって -日本語研究と構文理論の接点）発表レジュメ

石垣謙二（1955）『助詞の歴史的研究』岩波書店

大島資生（1996）「補文構造に現れる「こと」と「の」について」『東京大学留学生センター紀要』6,東京大学留学生　センター,pp.47-69

大島資生（2010）『日本語連体修飾節構造の研究』ひつじ書房

加藤重広（2006）「対象格と場所格の連続性－格助詞試論（2）－」『北大文学研究科紀要』118,pp.135-182

工藤真由美（1985）「ノ・コトの使い分けと動詞の種類」『国文学解釈と鑑賞』3,pp.45-52

久野暲（1973）『日本文法研究』大修館書店

近藤泰弘（1997）「「の」と「こと」による名詞節の性質」『国語学』190（左）pp.1-11

近藤泰弘（2000）『日本語記述文法の理論』ひつじ書房

佐治圭三（1993）「「の」の本質－「こと」「もの」との対比から－」『日本語学』12:11,pp.4-14

重見一行（1994）『助詞の構文機能研究』和泉書院

坪本篤郎（1984）「文の中に文を埋め込むときコトとノはどこが違うのか」『国文学解釈と教材の研究』29:6,pp.87-92

寺村秀夫（1978a）「「トコロ」の意味と機能」『語文』34,大阪大学文学部国文科 pp.10-19

寺村秀夫（1978b）「連体修飾のシンタクスと意味－その 4」『日本語・日本文化』7,大阪外国語大学留学生別科,pp.1-25

寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版

野田春美（1995）「ノとコト－埋め込み節をつくる代表的な形式－」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法（下）複文・連文編』くろしお出版 pp.419-428

野村益寛（2001）「参照点構文としての主要部内在型関係節構文」山梨正明他編『認知言語学論考 No.1　2001』ひつじ書房 pp.229-255

橋本修（1990）「補文標識「の」「こと」の分布に関わる意味規則」『国語学』163,pp.1-12

橋本修（1994）「「の」補文の統語的・意味的性質」『文藝言語研究　言語篇』25,筑波大学文藝・言語学系,pp.153-166

橋本修（1997）「補文標識「の」の統一的解釈をめぐって」『「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究報告書』I,　筑波大学,pp.367-374

堀江薫（2002）「日韓両語の補文構造の認知的基盤」大堀壽夫編『認知言語学Ⅱ：カテゴリー化』東京大学出版会,pp.255-276

益岡隆志（1997）『新日本語文法選書２複文』くろしお出版

レーバンクー（1988）『「の」による文埋め込みの構造と表現の機能』くろしお出版